

ボランティア仲間の皆さんへ 『あなたのボランティアのもと・原点は?』

この地域のボランティアの歩みをたどり、ボランティアの原点とこれからについて考えを深める『なごやのボランティア史』の編纂が進んでいます。編纂委員の3人が、ボランティアにまつわるあれこれを語り合いました。

(この記事は、2018年2月に開催した座談会を要約したものです。)

野村さんに託された思いをつなぐ

渡辺 ボランティア史の編纂に参加する動機としては、野村文枝さん¹⁾の存在が一番大きいよね。野村さんとの付き合いは35年くらい。彼女のほうが大ベテランだけど、私のこともちゃんと尊重してくれて、私たち夢喰人の活動も見てくれていた。その野村さんと話をする中で、今ボランティアをやっている人たちに伝わっていないことや考えてもらいたいことがあるよねと。そして、その話の最後に、「べんさん(渡辺勉さん)うちにたくさん資料があるんだよね。これを何とかしたいと思っているんだけど...」と。野村文枝さんという存在とその資料を何とかしたいという気持ちを受けとめてしまった自分がいた。受けとめた以上はね。

中村 私は野村さんを代表とするボランティアの皆さんに育ててもらって、今の自分がいると思っているので、恩返しをしないといけないなあと。それから、野村さんがやってきた実践を次につないでいくことが必要だということで、そのツールのひとつとして本作りはいいと思いましたね。本当は名古屋市社会福祉協議会(以下:名古屋社協)のボランティアセンター(以下:ボラセン)がボラみみに代わってやらなきゃいけなかったかなという気持ちもあって。

織田 そう思います!ばくの場合は、野村さんから「野村文枝の本じゃなくて、名古屋のボランティアがやってきたことをまとめて」という話をお聞きしました。すごく大変な作業だなと思っていたのですが、理事会に諮ると「すぐに取りかかるべきだ」と背中を押されました。野村さんにはいろいろ教えてもらったので、だからこそ残したい気持ちがあります。特に今のボランティアの状況の変化を感じると、残さないといけないなあと感じました。

渡辺 歴史を振り返ったり、整理したりすることで、こんなことがあった、こんな人がいたということが、できるだけ見えやすいようにしたいよね。こういう時代だからこそ、ボランティアって何だろう、どうあるべきだというようなことをじっくり考えられる「もと」になるような本にしたいというのがあるよね。

中村 私はやっぱり「原点」を考えるもの、それがベースにあります。しかも、名古屋「発・初」ということなので、先人の皆さんの思いや考えを伝えながら、原点が伝えられるようなものにしたいですね。

ボランティアは生き方そのもの

渡辺 以前、別の座談会で織田さんから「辞めたいと思ったことはありますか?」と聞かれた時に「辞める理由がなかった」と答えたけど、それは返事になっていなかったなと。辞める理由がないというか、やっている自分の中で当たり前のことになっていて、生き方になっている。自分の生き方だから、辞めるということはありませんよね。

どんなことを思っただけかという、高校生の頃から好きなことをやっていて、70年安保のあとの高校でヘルメットをかぶって活動していたような時代。社会に対して変革の意識や何とかしなきゃという気持ちは漠然と持っていて、自分は何者?何が出来る?何がやりたい?ということ自分を問いかけていた。何かできることを探さず、子どもと



(写真左から)渡辺さん、中村さん、織田

関わること、保育や教育のほうに自分の気持ちが動いて、保育の現場に入ったり、福祉大学に行ったりした。そして、「愛の実行運動²⁾」の仲間と一緒に活動する経験の中で、それまで持っていたボランティアのイメージが変わったんだよね。それまでは、ボランティアを偽善とか、胡散臭いという目で見ていたし、中途半端に手伝わつがいるから、福祉の現場の貧困はよくならないんだと思ってた時もあった。でも社会の変化や進歩って行政や制度がリードして変わっていくじゃなくて、問題を先取りして、運動として取り組み、自発的に動き、身銭を切ってきた開拓者がいたからなんだということを感じた。ボランティアって「次のことに関わること」なんだと自分の中に落ちてきた。障がいをもっている人でもハンディがある人でも当たり前にお付き合いしたり、その人のことを尊重しようという関わり方ができる人がいないと社会は変わらない、それがボランティアだと思ったんだよね。その後、就職のことを考えた時、仕事にするのではなく、そういうことを意識して生きていく人間になろうと思った。こういう風土を作るために動くことが自分のボランティア活動の中で大事なことから、運動的な視点を持ってやらないとだめだなとずっと思っている。

中村 私は具体的なエピソードはあまりないんだけど、中学2年生まで住んでいた家のそばに、学校に行っていない重度障がいの子がいたんです。おしゃべりは不自由だけどちゃんとしゃべれるし、まわりの大人が言うには「あの子

は学校に行っていないけど、本当は賢いんだ」というくらいの子でした。その子の弟と私が同じ歳だったので、よく一緒に遊んでいました。障がいのある子たちと分け隔てなく一緒に話をしたり、遊んだりという環境の中で育って来ました。自分のボランティアのもとという、その幼少の頃の地域環境だったのかなと思います。そして、名古屋市社協に入職したのが国際障害者年でした。本当にタイムリーで、いろいろな障がいの方と付き合うチャンスもできました。その後、名古屋市の総合社会福祉会館ができて、翌年にボランティア担当になったことで、さらにいろいろなボランティアの人に会うことができました。それから35年。

織田 その中で「鍛えられた」という言い方をよくしていますよね。

中村 それはやっぱり、例えば、野村さんをはじめボランティアの皆さんにとって「ボランティアセンターはこうあるべきだ」というのがあって、名古屋市社協の都合ではなく、もっとボランティアの立場に寄って、物事を考えるべきだという思いが強かったんだろうと思います。難しいところだけど、若い頃は自分で自分にやれることをやろうと思って、実際にやってきました。当時、ボランティア集会³⁾にしても、皆さんと一緒にだからやれたということもあります。

渡辺 ボランティア集会って、ボランティアの側から実行委員会をやらうと愛知県社会福祉協議会(以下:県社協)に話を持って行ったんだよね。県社協は話を聞いて、一緒にやってくれた。そういう意味では懐が深かったなあ。

学習もだいじ、実践もだいじ

中村 当時、名古屋市社協はボラセンを作ったけど、何をやっていくのか手探りの時期でした。県社協と一緒にやる意義もあったし、ボランティアの皆さんとの付き合いもできるし、ボランティア活動の振興にもなる。そういうことなら大賛成ということで実行委員に加わった。その時にすごいなと感じたのは、若い人ならわかるが、当時50代くらいの野村さんたちが参加していたこと。そういうご婦人たちが夜の会議に出られるというのがすごいなあと。

- 1 野村文枝さん 配食サービスをはじめ、傾聴グループの会長を務めるなど、名古屋の地域福祉ボランティアのパイオニア。
- 2 愛の実行運動 ドイツ人宣教師・ゲマインダ神父が提唱した「人はみな兄弟」の理念のもと、カトリック教会の中から生まれた団体。人権、平和、福祉などの諸活動に取り組んでいる。略称は頭文字を取って「AJU」。
- 3 ボランティア集会 ボランティア同士が活動分野や世代を越えて交流し、学び合う場として、1984年から7回にわたり「愛知県ボランティア集会」が開催された。この愛知県ボランティア集会は、名古屋市婦人ボランティア協議会の女性リーダーに加え、愛知県学生ボランティア集会実行委員、障害者青年学級ボランティアによる実行委員会と愛知県社協、名古屋市社協の三者協働で企画・運営された。その後、1992年からは「名古屋市ボランティア集会」が10回開催された。

